

H. 知的財産権の出願・登録状況
なし

参考文献

O'Connell, A. F., Nichols, J. D. and
Karanth K. U. 2010. Camera traps in Animal
Ecology. Methods and analyses. Springer
271 pp



図 1. 調査に用いた自動撮影装置 YoyShot

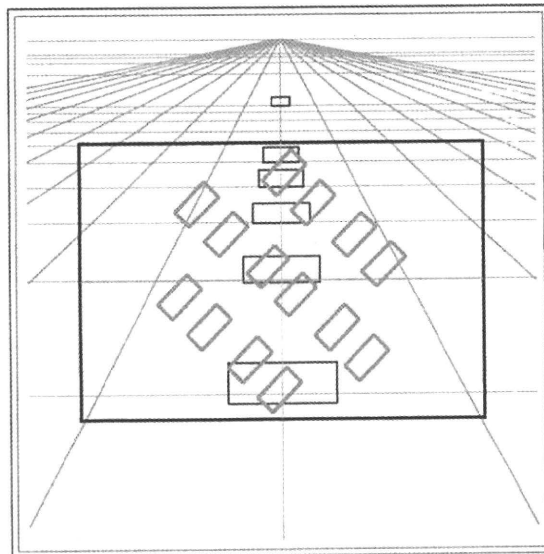


図 2. カメラ画角に対する検知エリアの分布例 (YoyShot : SSK2822 レンズ)

大きな四角 : 28mm レンズをもつカメラの画角。斜めの四角 : 検知区画。段階的に大きさの変わる小さな四角 : キツネ大の動物の見かけの大きさ。

自動撮影装置を高さ 150cm、俯角 37° で設置したときの地面の 1m グリッドと動物がどのように見えるかをカメラの画角と検知エリアの分布との関係で見たもの。背景と温度が異なる動物の体が検知エリアに入ると、そのセンサが受ける熱の変化で検知が行われる。検知されやすさには、動物の体温と背景の温度差だけでなく、動物の見かけの大きさが大きく関わる。

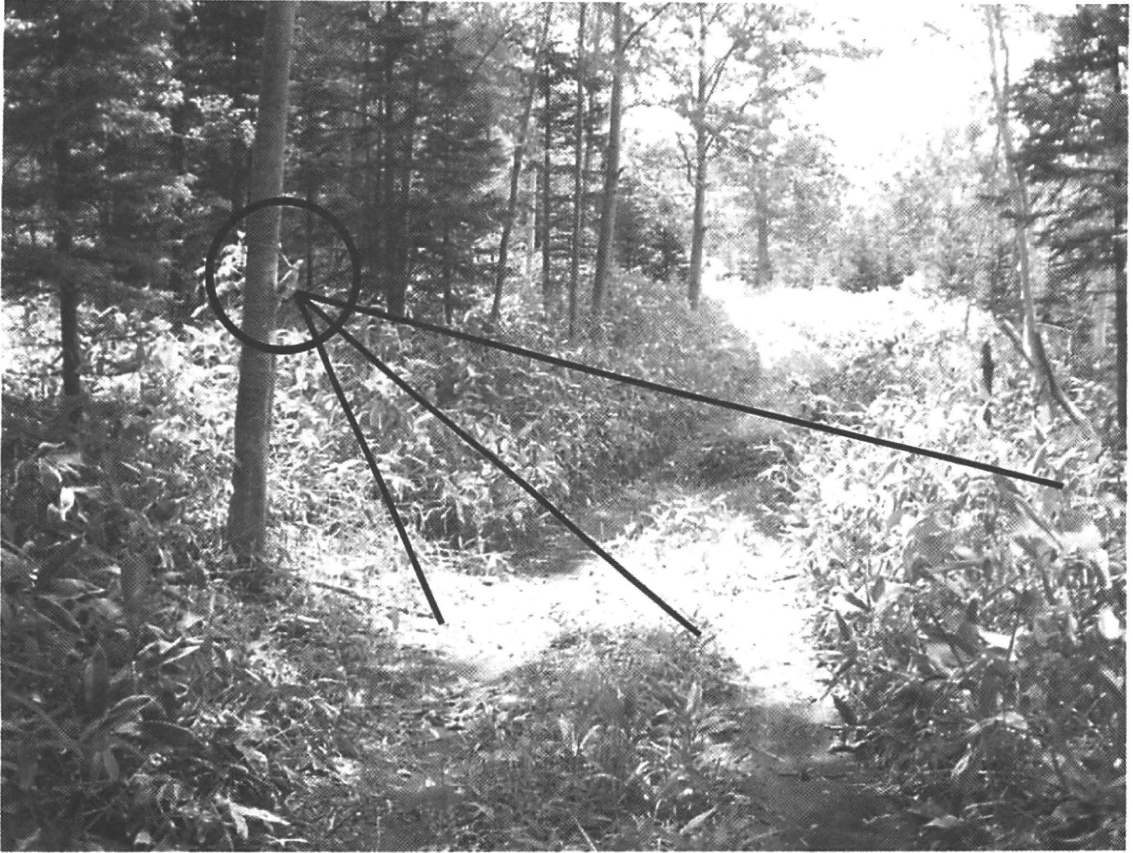


図3. 林道における調査例

林道脇の木に装置を高さ約150cm、俯角37度で設置する。



図4. 固定観測点

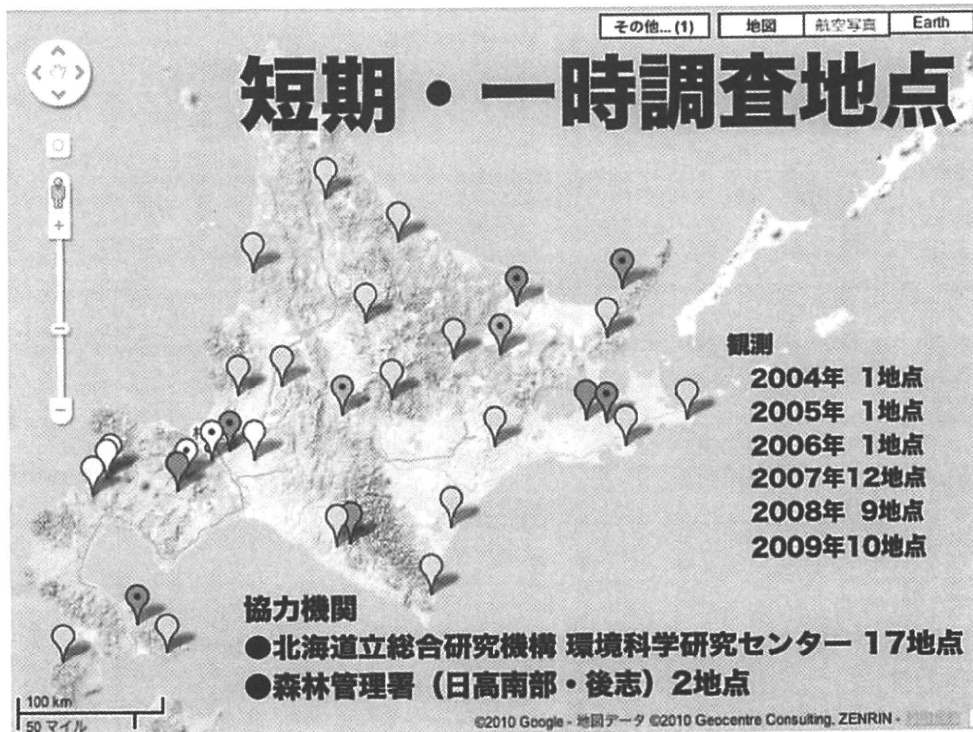


図5. 短期・一時調査地点

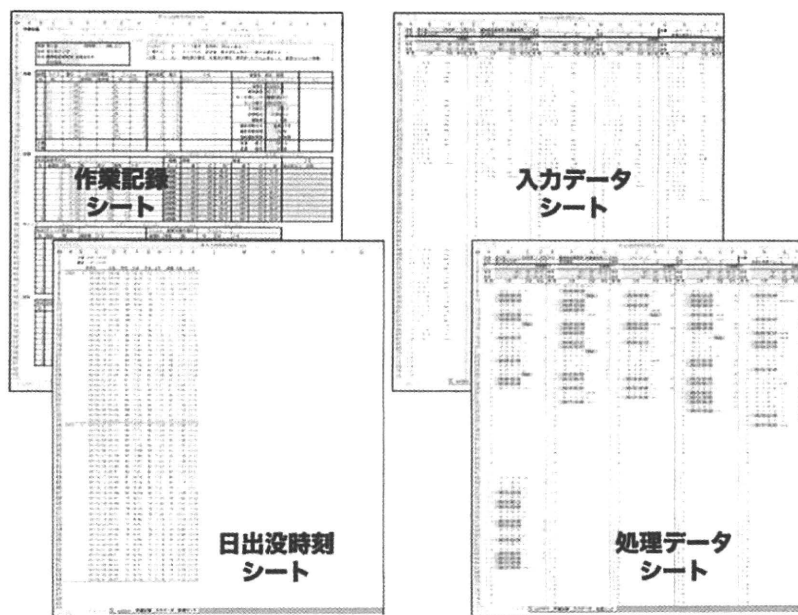


図6. データファイルのシート構成

作業記録シートに調査地の経緯度など入力、日出没時刻シートに調査期間中の現地の日出没時刻の推移を記載、入力データシートに撮影データを記入し、マクロを実行すると、データが処理され、処理データシートが作成される。

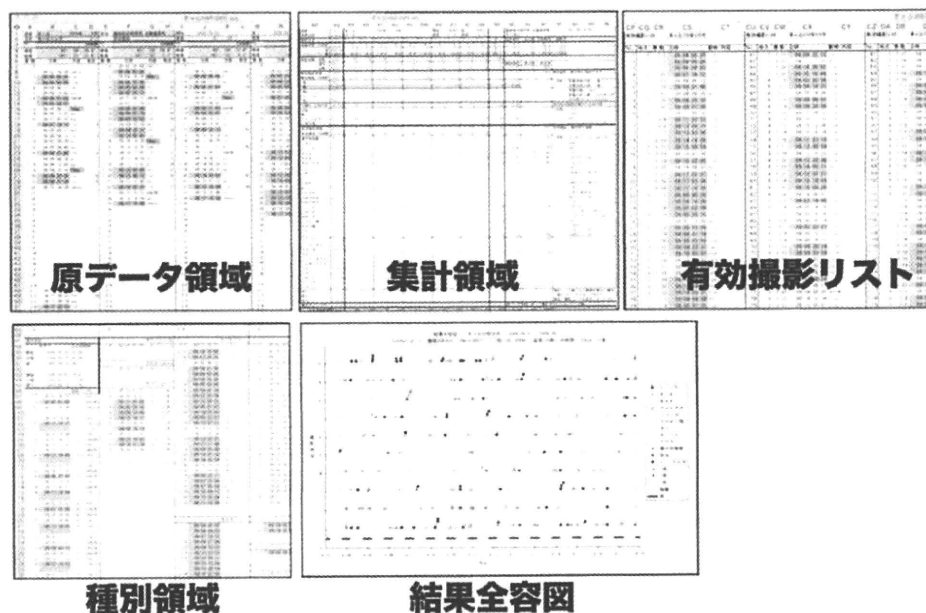


図7. データシートの各領域

データシートは主に5つの領域から構成される。原データ領域では撮影地点別に撮影順でデータが記載され、撮影内容にしたがって色分けされる。集計領域では、各地点別・撮影内容（動物）別に撮影数が集計される。有効撮影リストは、撮影内容が鳥獣である写真のリストである。種別領域では、撮影内容（動物）別にデータがまとめられる。結果全容図については別図参照。

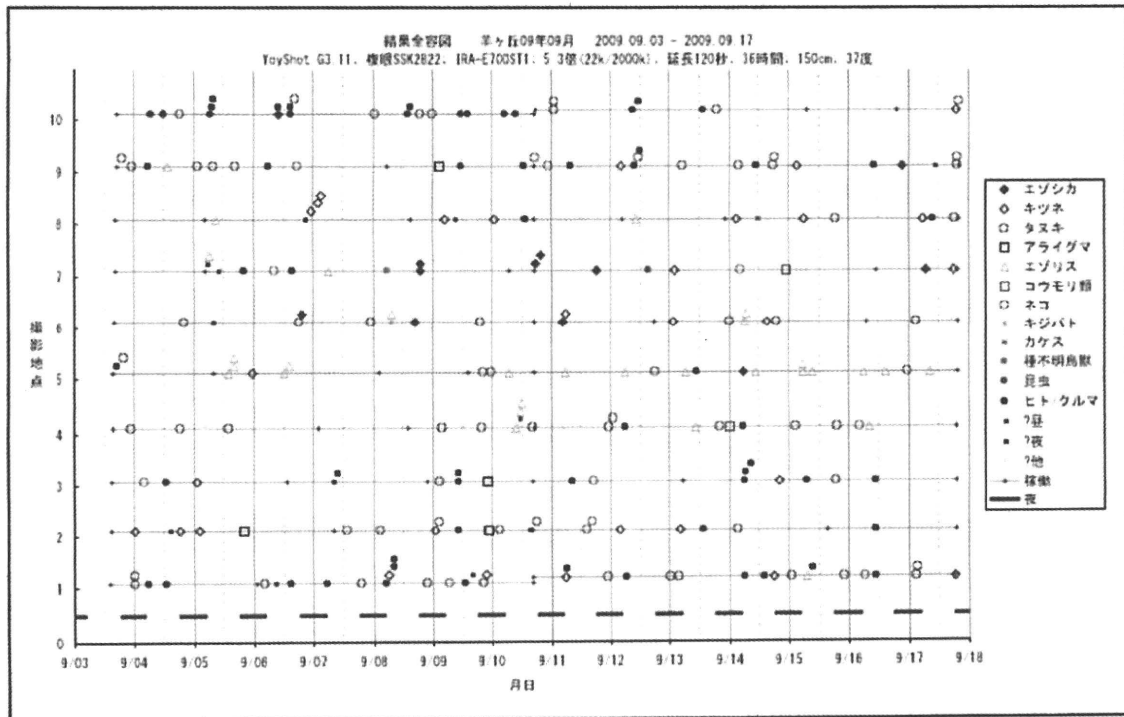


図8. 結果全容図

横軸が日時、縦軸方向が各撮影地点を表す。図中の水平線は、装置の稼働状態を表し、その上の各種マークは撮影内容を表す。撮影時刻が近い場合、マークが重ならないように高さを変えて表示する。



図9. 札幌市羊ヶ丘 2010年8月の調査におけるキツネの撮影地点とその頻度

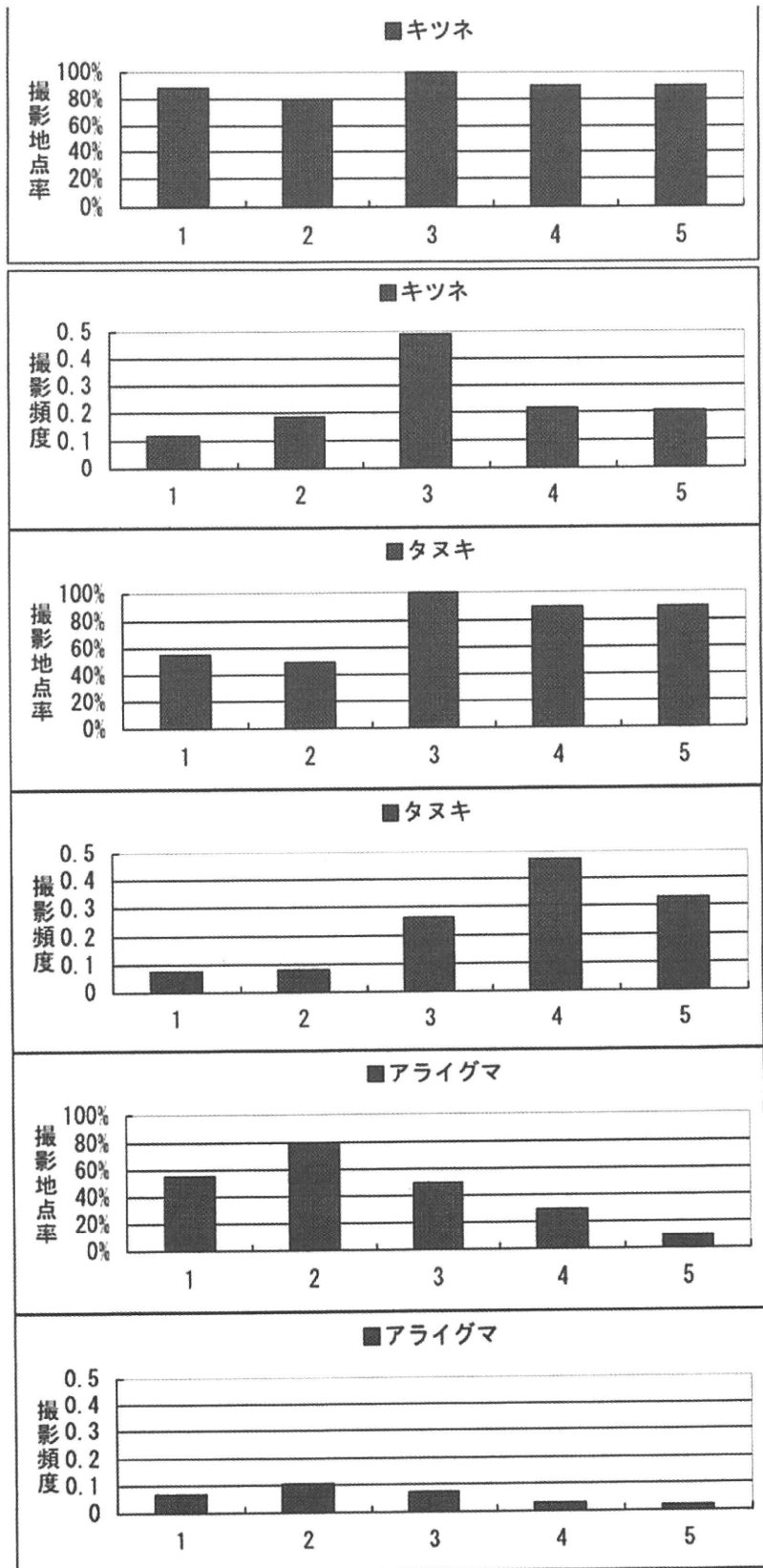


図 10. 札幌市羊ヶ丘 5 年間にわたる撮影地点率と撮影頻度の変化



図 13. 野幌森林公園における 2007 年以降の調査地点 12 ヶ所

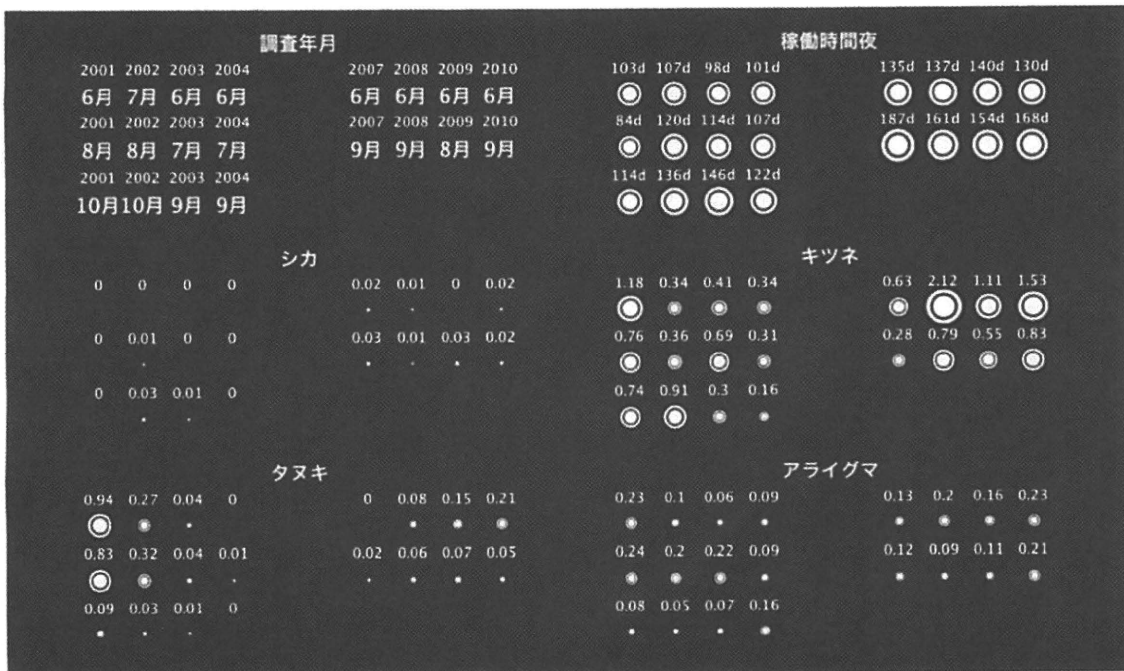


図 14. 野幌森林公園における野生哺乳類 4 種の撮影頻度の動向

伴侶動物に関する研究グループ

「伴侶動物等に由来感染症の診断法開発と管理に関する研究」

～カプノサイトファーガ感染症に関する疫学調査・研究および
イヌ・ネコ咬傷・搔傷由来細菌感染症に関する大規模アンケート調査～

国立感染症研究所：今岡浩一

厚生労働科学研究費補助金（新興・再興感染症研究事業）
分担研究報告書

伴侶動物等由来感染症の診断法開発と管理に関する研究
（カプノサイトファーガ感染症に関する疫学的調査・研究および
イヌ・ネコ咬傷・搔傷由来細菌感染症に関する大規模アンケート調査）

研究分担者	今岡 浩一	国立感染症研究所	獣医科学部	第一室長
研究協力者	鈴木 道雄	国立感染症研究所	獣医科学部	主任研究官
研究協力者	木村 昌伸	国立感染症研究所	獣医科学部	主任研究官

研究要旨： カプノサイトファーガ属菌はイヌやネコの口腔内に常在するグラム陰性桿菌である。特に *Capnocytophaga canimorsus* が臨床的に重要で、ヒトがイヌやネコに咬傷・搔傷（以下、咬搔傷）を受けた際に傷口から感染する。その患者発生状況が不明な点から、継続して国内症例報告を医中誌、各種学会抄録集などを検索し調査している。また、今年度は、雑誌、新聞、テレビ、そして、厚生労働省から Q&A として、これまでの成果を広く発表・広報した。その効果もあり、医療機関からも患者情報が寄せられるようになってきた。その結果、1993 年以降、22 例（イヌ咬傷 12 例、ネコ咬搔傷 7 例、不明 3 例）を把握し、うち 7 例が死亡症例（イヌ咬傷 2 例、ネコ搔傷 4 例、不明 1 例）であった。

また、イヌ・ネコだけでなく、近年、家屋内およびその周辺で多く見られ、有害鳥獣として問題になっているアライグマの同菌保有状況を検討した。その結果、イヌやネコが保有している *C. canimorsus* や *C. cynodegmi* の保菌は認められなかった。ただ、今のところ、その病原性やリスクは不明であるが、別の *Capnocytophaga* 属菌を保菌していることが明らかとなった。

今まで詳細が明らかになっていなかったカプノサイトファーガについて、調査研究を行ってきた。しかしながら、一般飼育者におけるそのリスクは明らかになっていない。そこで、今回、一般人を対象に大規模なインターネットアンケートを実施し、イヌ・ネコ飼育状況、咬搔傷事故の経験状況、発症状況、医療機関受診状況等を調査した。また、その際、カプノサイトファーガ症だけでなく、同じくイヌ・ネコから感染するパスツレラ症、ネコひっかき病を含めた計 3 疾患について、その認知度・罹患状況等を調査した。イヌ・ネコ咬搔傷由来細菌感染症に関するリスクアナリシスに有用な結果を得た。

A. 研究目的

カプノサイトファーガ属菌 (*Capnocytophaga* spp.) はヒトや動物の口

腔内に常在するグラム陰性桿菌である。イヌ・ネコは *C. canimorsus* (カニモルサス)、*C. cynodegmi* (サイノデグミ) の 2 種を保有しており、*C. canimorsus* 感染の方が臨床的に重要である。ヒトがイヌやネコに咬傷・搔傷（以下、咬搔傷という）を受けた際に受傷部位から感染するほか、傷口をなめられての感染など非咬傷性の接触感染もある。症状としては発熱のほか、敗血症、腎不全、髄膜炎や播種性血管内凝固症候群（DIC）など、局所症状よりも強い全身症状を示すことが知られている。世界中で 250 例ほどの患者が報告されているまれな疾患であるが、敗血症を発症したときの死亡率は 30%と、非常に危険な感染症である。

我々は、より特異性の高い PCR 法を開発し、これまで不明であった、国内のイヌ・ネコにおける *Capnocytophaga* spp. の保菌状況を調査し、高率に保菌していることを示した。また、同じく不明であった国内の患者発生状況についても、散発的に報告されていることを明らかにした。

今回、1) 国内の患者発生状況を継続して調査した。2) 人家の周辺でも多く見られ、有害鳥獣として問題になっているアライグマの同属菌保有状況を検討した。3) 一般飼育者におけるそのリスクは明らかにするために、一般人を対象に大規模なインターネットアンケートを実施した。

B. 研究方法

1) 国内症例調査

1. カプトサイトファーガ感染症例の調査：国内症例報告を医中誌、各種学会抄録集、ウェブサイトを検索して集めた。また、医療機関から我々のところに寄せられた患者情報を整理した。

2) アライグマの調査

1. サンプル：大阪府において有害鳥獣として駆除されたアライグマ 43 頭の歯根部スワブサンプルを、大阪府家畜保健衛生所病性鑑定課（山本祥二、大塚宏美先生）より提供を受けて用いた。

2. 菌分離：スワブを 1ml のハートインフュージョン液体培地（HI Broth）に懸濁した。懸濁液 10ul を、20ug/ml ゲンタマイシン加・5%ウサギ脱繊維血含有 HI 寒天培地（G/RB-HI Agar）に蒔き、嫌気条件下、37°C で培養した。約 1 週間後に現れたコロニーを適宜、分離培養（G/RB-HI Agar、5% CO₂、37°C）した。それぞれのコロニーは、PCR により同定した。

3. 遺伝子の検出：懸濁液の残り（約 950ul）を 10ml の HI Broth に加え、5%炭酸ガス存在下、37°C、24~48 時間培養した。培養後、培養液 1ml の遠心沈渣を 100~200ul の蒸留水に溶解し、99°C、20 分の加熱処理により DNA を抽出した。それぞれ *C. canimorsus*、*C. cynodegmi* および *Capnocytophaga* 属菌全般の 16S rRNA 遺伝子に特異的プライマーを用いて、PCR 法による遺伝子検出を行った。また、同様にイヌ・ネコの口腔内に存在し、動物由来感染症であるパストレラ症の主な原因菌である *Pasteurella multocida*（パストレラ・ムルトシダ）についても遺伝子検出を行った。

3) 大規模アンケート調査

1. インターネットアンケート：インターネットを利用した登録モニターによるアンケート調査を実施した（資料 1）。アンケート調査は 2 段階で実施し、まず大規模スクリーニング調査により、犬猫の飼育状況や咬搔傷経験の有無、その後の発症経験、医療機関受診に関する情報を収集した（アンケート I）。次に、発症経験有りと回答し

た人に対して、咬搔傷を受けた部位や症状の詳細、医療機関を受診した理由あるいは受診しなかった理由等についての回答を収集した（アンケート IIa&b）。得られたデータについて、集計・解析を行った。企画した調査項目と調査方法に従って、調査は株式会社東レリサーチセンターに委託して実施した。

C. 研究結果

1) 国内症例調査

1. カプノサイトファーガ感染症例の疫学調査： 国内の *C. canimorsus* 感染患者 22 例を表 1 に示した。1993 年に最初の患者が報告されて以来、22 例の患者が確認され、うち 7 名が死亡していた（表 1 A）。患者の年齢は 20 歳～90 歳代で、40 歳代以上が 91%と大部分を占めていた。また、男性が 68.2%と女性よりも多くなっていた（表 1 B）。症状は敗血症が最も多く、髄膜炎をあわせて、報告されている患者のほとんどが重症者であった（表 1 C）感染経路は、犬咬傷 12 例、猫咬搔傷 7 例、不明 3 例であった。そのうち、ネコ搔傷では 4/5 が死亡していた（表 1 D）。一般的に現病歴のある者の方が、種々の感染症に対して感染・発症リスクは高くなると言われるが、本疾患でも現病歴を持つ者が 60%を占めていた。ただ、持たない者も半数近くいることになる（表 1 E）。

2) アライグマの調査

1. 菌分離： *C. canimorsus* および *C. cynodegmi* は全く分離されてこなかった。その他のカプノサイトファーガ属菌と考え得る菌がいくつかのサンプルより分離された（24 サンプルから 51 株）。これら分離菌については現在、検討中である。

2. PCR による遺伝子検出： イヌ・ネコが保菌している *C. canimorsus* および *C. cynodegmi* に特異的な PCR では、どちらの遺伝子も、どのサンプルからも検出されなかった。カプノサイトファーガ属菌を検出するとされる PCR では、遺伝子の増幅がすべてのサンプルで認められた。（表 2）

3. *Pasteurella multocida* の検出： *P. multocida* の保菌状況を特異的 PCR により検討したが、*P. multocida* 特異的遺伝子の増幅は、どのサンプルでも認められなかった（表 2）。

3) 大規模アンケート調査（資料 1）

1. アンケート I： 20 歳以上を対象として有効回答数 50,000 を得た。年齢分布、地域分布ともに 2005 年の国勢調査結果とほぼ大差のない対象を抽出した。全体の 34.2%が過去 5 年以内にイヌ・ネコを飼育していた。全体の 28%（13,983 名）がイヌ・ネコ咬搔傷を経験していた。そのうち 12.6%（1,761 名）が発熱、倦怠感、患部の腫脹など何らかの症状を示していた。これは、対象 50,000 名のうち、3.52%に相当する。症状では患部の腫脹・化膿など局所症状が 1,589 名と大部分を占めていたが、全身症状を示した者も 332 名いた。症状を示した者のうち 43.7%（769 名）が医療機関を受診し、250 名が何らかの病名診断を得ていた。疾患の認知度を聞いたところ、カプノサイトファーガ症やパスツレラ症は 92%以上が疾患の事をよく知らなかった。猫引っ搔き病はもっともよく認知されていたが、それでも 17.4%の認知に過ぎなかった。

2. アンケート IIa： 医療機関を受診した者の受傷部位では手・腕を咬まれた者が 70%と最も多かった。症状は傷口の腫れが 77.3%、痛みが 72.0%と局所症状が多かったが、発熱

(22.7%) や倦怠感 (7.6%) など全身症状を示した者もいた。医療機関を受診した理由では、症状が重かったや心配だったなど、患者自身の判断によるものがそれぞれ 50% に上った。その他、家族にすすめられた (21.2%) や獣医師にすすめられた (5.3%) もあった。市販の薬で改善しなかったという者が 12.9% いたが、このことは、受傷後すぐに医療機関を受診したのではないことを示し、症状の悪化と治療の遅れをもたらす可能性を示している。医療機関では傷口の消毒など局所症状に対する治療が 84.9% と最も多かったが、63.6% が飲み薬を処方されていた。外科手術 11.4%、入院 0.8% と重症例も見られた。医師の診断は、病名の診断はない・覚えていないが 73.5% と最も多かった。診断がついた者では、いわゆる細菌感染症が 12.9% だが、その他、カプノサイトファーガ症やパストツレラ症の 0.8% に比較して、猫引っ掻き病が 12.1% と多くなっていた。

3. アンケート IIb: 医療機関を受診しなかった者の受傷部位は、手・腕が 50% 強であった。症状は患部の痛みと腫れが 80% 前後と最も多かったが、発熱や倦怠感など全身症状を示した者も見られた。受診しなかった理由では、すぐに治ると思った (63.6%)、症状が重くなかった (40.4%)、面倒だった (25.3%) など、やはり自身の判断によるものが多かった。

D. 考察

カプノサイトファーガ・カニモルサス感染症は、世界中で 250 例ほどの患者報告と、まれな感染症ではあるが、敗血症や心内膜炎を発症したときの死亡率は約 30% にのぼる。ただ、この死亡率は、症例報告に値すると考えられた重症化したケースにおけるものである。また、病因にかかわらず中

高年齢者では重症敗血症になった場合にはその 30% 程度が死亡するとされている。したがって、カプノサイトファーガ感染症の死亡率が 30% というのではなく、カプノサイトファーガ感染症は死亡率が 30% になる重症敗血症に進展することがあると示している。カプノサイトファーガ感染症に関する報告の大半は重症例であり、軽症者を含めた実感染者数は、もっと多いと思われる。1976 年に最初に米国で文献報告されてから、まだ 30 余年ほどしかたっていないことから、新しい感染症であると思われがちだが、単に原因菌が特定されるようになっただけのことであり、ヒトがイヌ・ネコとともに暮らすようになったはるか昔から疾患は存在していたと考えられる。世界での感染経路はイヌ咬傷 59%、ネコ咬搔傷 9% となっている。それに対して、国内では、ネコ咬搔傷によるものが 7/22 (32%) と多くなっており、これは日本での特徴と思われる。ネコが自分の手を舐める事により、ネコの手爪に菌が付着し感染源になっていると考えられるが、なぜネコ搔傷による死亡者が多いのかは不明である。また、ネコ搔傷に由来する死亡者は 4/5 (80%) と致死率が高く、これは傷が軽微なため適切な処置を早期に行わない、また受けなかったことによるのではないかと考えられた。

患者の約 70% が男性であり、年齢別では 50~60 才代をピークとして 40 才以上が約 90% を占め、中高年齢者に多い。この傾向は世界のそれに等しかった。患者には、糖尿病、アルコール依存症など慢性疾患の罹患患者、脾臓摘出者など、免疫機能の低下したいわゆる immunocompromised host が多いとされるが、特に基礎疾患のない患者も存在していた。すなわち、基礎疾患の有無にかかわらず、中高年齢者 (特に男性) が本疾患におけるハイリスクであると考えて

おくべきである。

国内では、我々が文献的に調査をした範囲では、1993年のイヌ咬傷から感染した敗血症例を最初として、これまでに22例を把握している。そのうち15例が2007年以降の発生と、近年の患者が多いのは、臨床現場で認知されてきているためと思われるが、実患者数増加の可能性も否定できない。いずれにしてもイヌ・ネコの口腔内常在菌で除菌法も確立しておらず、かつ、ワクチンもない以上、感染予防のための一般的な心得として、イヌ・ネコに接する時に咬まれない・引っかけられないように注意する事、自身の健康を維持する事、が大切であろう。また、咬搔傷後に体調に異常を感じたらすぐに医療機関を受診し、イヌ・ネコ咬搔傷歴を申告することが重要である。

厚生労働省は、我々のこれまでの研究成果も踏まえて2010年5月21日に情報提供として「カプノサイトファーガ・カニモルス感染症に関するQ&A」を各自治体（管内医療関係者への周知を含む）や日本獣医師会など関係各局に通知するとともに、厚生労働省ウェブサイト [<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekka-ku-kansenshou18/capnocytophaga.html>] への掲載を行った（資料2）。しかしながら、カプノサイトファーガ症は臨床現場での認知度の低さや菌の増殖が遅いことによる同定の困難さなどの要因から、確定診断に至っていない症例が存在することも考えられ、実際の症例数は現在把握されているよりも多いと思われる。現在、臨床検査の現場では、血液培養検査数を増やす方向にあり、その結果として今後カプノサイトファーガ属菌の検出報告が増えるのではないかと推定される。

アンケート調査では、インターネットによるモニターアンケート調査により、大規模調査を行い、イヌ・ネコの飼育状況や咬

搔傷経験、そして人獣共通感染症の発症疑いのある人の抽出に加え、カプノサイトファーガ症、パスツレラ症、猫ひっかき病といった、イヌ・ネコから感染しうる疾病の認知度まで幅広く情報を収集できた。その結果、イヌ・ネコから咬搔傷を受けるのは手・腕が多く、その後の症状の多くは傷口の悪化であるが、一部には、発熱や倦怠感などの全身症状も発症しているようであった。具合が悪くなった経験のある人の半数弱（44%）が医療機関を受診しており、この結果は想定していたよりも多かった。受診理由では、本人の判断が最も多かったこと、また、結果から得られた疾患の認知度の低さを考えると、社会に対して広く情報を公開し、啓発をすることがますます重要であると思われる。今回の結果は、イヌ・ネコ飼育者およびそれに付随する咬搔傷事故、疾患の発症など多くの知見を与えた。これらは、イヌ・ネコ咬搔傷関連疾患のリスクアナリシスにも有用な情報を与えると思われる。

E. 結論

国内でも *C. canimorsus* の感染・発症例が一定数存在することが明らかになってきた。死亡例では医療機関を受診してから死亡までの時間が極めて短いこと、原因菌の同定には時間がかかり、患者の容態はそれを待つに十分な時間がない。そのため医療機関では、敗血症に対して原因が特定されない状況で迅速な救命医療を行う必要がある。そのような状態を改善するためには医療従事者におけるイヌ・ネコ咬傷・搔傷感染症への理解が求められる。また、今回の調査で明らかになったように、一般人の間でもまだまだ認知度は十分であるとは言えない。従って、今後も動物と接する飼主その他の人々に対しても、咬傷・搔

傷を受けた際のリスクについて啓発していく必要があると考えられる。

そのために、今後も継続して症例の情報収集に努め、薬剤感受性や各臨床症例における特徴的な所見など情報を蓄積していくことが大切であると考えられる。また、明らかになっていないカプノサイトファーガ属菌の病原性因子や感染・発症メカニズムについての解明も行う必要がある。

F. 健康危害情報

本調査結果からもわかるように、疾患に対する認知度が未だ十分であるとは言えない。今後も広く動物と接する飼い主その他の人々、また医療関係者に対しても、咬傷・搔傷を受けた際のリスクや疾患について啓発していく必要があると考えられる。

G. 研究発表等

1. 論文発表等

(1) Suzuki, M., Kimura, M., Imaoka, K., and Yamada, A. : Prevalence of *Capnocytophaga canimorsus* and *Capnocytophaga cynodegmi* in dogs and cats determined by using a newly established species-specific PCR. *Veterinary Microbiology.*, 144:172-176, 2010

(2) 古谷明子, 吉田里美, 久保綾, 山下麻衣子, 伊藤達章, 鈴木道雄, 今岡浩一, 大楠清文. 自動血液培養で陽性シグナルを呈しなかった *Capnocytophaga canimorsus* による敗血症の一症例. *日本臨床微生物学雑誌*, 20(3):182-187, 2010

(3) 鈴木道雄, 木村昌伸, 今岡浩一, 山田章雄. *Capnocytophaga canimorsus* 感染症. in : 獣医畜産新報, 文永堂, 63(3): 217-218, 2010

(4) 今岡浩一. 犬を飼うときに気をつけ

たい感染症. in : チャイルドヘルス, 診断と治療社, 13(8): 567-570, 2010

(5) 今岡浩一, 鈴木道雄. *Capnocytophaga canimorsus* 感染症. in : アニテックス, 研成社, 22(11): 23-25, 2010

(6) 鈴木道雄, 今岡浩一. *Capnocytophaga canimorsus* による人獣共通感染症. in : 皮膚病診療, 丸善, 32(12): 1345-1351, 2010

2. 学会発表等

(1) 今岡浩一. カプノサイトファーガ感染症について: 講演. 平成22年度公衆衛生講習会(日本獣医師会委託事業・関東地区), 千葉, 2010年8月

(2) 鈴木道雄, 木村昌伸, 今岡浩一, 山田章雄. *Capnocytophaga canimorsus* 臨床分離株およびイヌ・ネコ口腔内分離株の性状. 第150回日本獣医学会学術集会, 帯広, 2010年9月

(3) 今岡浩一. カプノサイトファーガ・カニモルサス感染症について. 厚生労働省平成22年度動物由来感染症対策(狂犬病予防を含む)技術研修会, 東京, 2010年10月

(4) 今岡浩一, 鈴木道雄. カプノサイトファーガ症の現状: 特別講演. 第10回人と動物の共通感染症研究会学術集会, 東京, 2010年10月

(5) 今岡浩一. カプノサイトファーガ・カニモルサスの疫学. 第23回地方衛生研究所全国協議会関東甲信静支部細菌研究部会総会, 宇都宮, 2011年2月

(6) 今岡浩一, 木村昌伸, 鈴木道雄. 犬・猫咬傷・搔傷発生状況と由来感染症に関するアンケート調査. 第151回日本獣医学会学術集会, 東京, 2011年3月

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし。

表 1) 国内の *C. canimorsus* 感染者発生状況

A) 患者発生状況

発生年	人数(死亡)
1993	1
2002	1 (1)
2004	3 (1)
2006	2 (1)
2007	3 (1)
2008	7 (2)
2009	1
2010	4 (1)

B) 年齢構成

年齢	男	女	全体	%
0	0	0	0	0.0
10	0	0	0	0.0
20	1	0	1	4.5
30	0	1	1	4.5
40	4	0	4	18.2
50	2	2	4	18.2
60	5	1	6	27.3
70	3	2	5	22.7
80	0	0	0	0.0
90	0	1	1	4.5
合計	15	7	22	
%	68.2	31.8	100	

C) 主症状

主症状	人数(死亡)
敗血症	16 (6)
髄膜炎・意識障害	2 (1)
頭痛・発熱	1
創部膿瘍・腫脹	2
電撃性紫斑	1

D) 感染経路

感染経路	人数(死亡)
犬咬傷	12 (2)
猫咬傷	2
猫搔傷	5 (4)
不明	3 (1)

E) 現病歴

現病歴	人数(死亡)
あり	13 (5)
なし	8 (2)
不明	1

表 2) アライグマからの PCR によるカプノサイトファーガ特異的遺伝子の検出

～特異的	陽性	陰性	合計 (頭)
<i>C. canimorsus</i>	0	43	43
<i>C. cynodegmi</i>	0	43	43
<i>Capnocytophaga</i> spp. (上記 2 種を除く)	43	0	43
<i>Pasteurella multocida</i>	0	43	43

資料1) イヌ・ネコ咬傷・搔傷由来感染症に関するアンケート調査

目次

I. 調査概要	1
1. 調査テーマ	1
2. 調査の目的	1
3. 調査方法	1
4. 調査期間	1
II. 成果	2
1. アンケート調査の設計	2
1.1 アンケートIの概要	3
1.2 アンケートIIaの概要	3
1.3 アンケートIIbの概要	3
2. 集計結果	4
2.1 アンケートI	4
2.1.1 回答者属性	4
2.1.2 設問回答 集計結果	5
2.2 アンケートIIa	12
2.2.1 回答者属性	12
2.2.2 設問回答 集計結果	12
2.3 アンケートIIb	19
2.3.1 回答者属性	19
2.3.2 設問回答 集計結果	19
3. 考察とまとめ	24

添付資料1 アンケート画面

1. 調査概要

1. 調査テーマ

イヌ・ネコ咬傷・搔傷由来感染症に関するアンケート調査

2. 調査の目的

イヌ・ネコ咬傷・搔傷由来感染症に関する一般市民における認知度や犬猫の咬傷・搔傷経験率などをアンケート調査により情報収集する。

3. 調査方法

インターネットを利用した登録モニターによるアンケート調査を実施した。

アンケート調査は2段階で実施し、まず大規模スクリーニング調査により、犬猫の飼育状況や咬傷・搔傷(以下、咬搔傷という)経験の有無、その後の発病経験、病院受診に関する情報を収集した。次に、発病経験有りと回答した人に対して、咬搔傷を受けた部位や症状の詳細、病院受診した理由あるいは受診しなかった理由等についての回答を収集した。得られたデータについて、集計・解析を行い考察を加えた。

4. 調査期間

平成 22 年 9 月 2 日～平成 22 年 11 月 22 日